まずは学類教育

山口　亨
会計検査院第５局上席調査官（特別検査担当）付専門調査官

1. 公務員志望者と接して

国家公務員採用試験においても、はたまた合格後の各府省においても、面接という関門が待ち受けており、私は面接官という立場を通じて後輩に接する。人事院において行われる面接試験においては大学名を伏せる約束になっているので、筑波大学の出身者であるか否かは、受験生からの失言でもない限りわからない（失言の程度によっては減点の対象ともなるらしい。）。しかし各府省における面接の段階では、大学学部（学類）名程度は明らかにすることが求められているようであり、本院においてもそれは同様である。

かつてはⅠ種Ⅱ種を問わず採用予定者数に近似した数しか最終合格とはしなかったので、最終合格すれば概ねいずれかの府省には採用されることができた。しかし昨今はより人物本位の採用に変えた一貫として最終合格者数を著しく増加させたため、合格しながら採用されない者が増加しており、各府省における面接の重要性が高まっている。

数年間、主として法律や行政、経済経営等文科系の区分を選択して受験した学生（主として学部卒業者か卒業見込者）について、三桁に達する者を個別に面接してきたので、多くの後輩に会う機会に恵まれた。

筑波大学生を一括りにして、他大学生と比較することは危険かつ困難であるかも知れない。ただ、このような面接官としての経験を通じて、一定の後輩像を描けることができるようになってきた。

2. 何か覇気がないような。

各府省にとっても、今後30年以上公務に貢献することを期待できる人材を確保するのであるから、極めて真摯に学生に対応する。試験合格という事実により社会人として必要な基本的な知識水準には到達してい

るという前提なので、面接においては考え方や趣向、社会性なども含め、総合的に公務、あるいはそれぞれの府省にふさわしい人材か否かを判定する。

我々が解決しなければならない問題は無数にころがっている。それらの問題のほとんどは、過去において同種の事例がないものである。それに対して適正かつ社会的に妥当な解決策を提示できるかが、私たちに公務員にとって最も必要な能力ではないかと考えている。

それを試す最も適した手段としては、学生と「議論する」ことであると確信している。各学生が興味を持っているいろいろな事件でも、あるいは新聞紙上を飾っている記事でも構わない。それらを素材に、「これにどのような問題があるか。その問題に対して君ならどう解決するか」を徹底的に議論する。議論を通じて、「どの程度問題の所在を客観的に把握し、かつ人にわかりやすく自分の意見を伝えられるか」がわかる。「君の意見にはこういう反論が予想されるが、それに対して君はどう答えるのか」などと次々と質問を浴びせていくと、どの程度しっかりした考え方を持っているかもおおむね想像がつく。

このような議論を多くの学生と行っていると、「採用したい学生」と「採用に及ばない学生」をかなり明瞭に区別できる。自分の意見そもそもが曖昧な学生とか、新聞の論説を受け売りにしている学生、少しでも反論されるとすぐに思考を止めてしまう学生、「大学の授業ではやらなかった」などと嘆く学生など、必要ないのである。

こういう選考方法をとると、採用したいと確信する学生の所属大学は、残念ながらいわゆる都内大手大学の学生で寡占化されてしまう。このような寡占化の傾向は各府省とも同様であると思うが、特定の少数の大学卒業者によって占められるよりは、全国各地の大学からも可能な限り優秀な者を採用したいと念願している。しかし、その願いはなかなかかなわないのが実情である。

3. 何が足りないのか。

大学は就職予備校ではないから、そのような「議論する能力」を身につける場を提供する必要はないと言われるかも知れない。しかし、議論をするために必要な最低限の知識、自分の意見をわかりやすくまとめる能力、さらには人からの意見を冷静に聴くという能力は、公務員に限らず社会人であれば必須とされるのではないだろうか。

(1)「演習」

行政官が解決しなければならない問題に直面した場合、通常は短時間のうちに結論を導くことが要求される。この結論に至る過程としては、担当者がまとめた原案につ

いて、同僚や上司と議論することを経て、より妥当な結論に到達する。さらには他府省担当官とも大激論となる。この議論の過程で、原案の有する問題点が浮かび上がり、原型をとどめないほどの修正を強いられたりすることも珍しくない。

私は学部は私学の出身であるが、この議論をする能力が最も培われたと思っているのが演習である。ある特定の科目に関する事例問題について、20人程度の学生が賛否両論を展開し、指導教員は基礎的な知識の確認とか、議論が枝葉に入り込みそうなときには軌道修正する役割を果たしている程度で、あまり口は出さない。この演習があらゆる科目に通年、かつ各科目ごと複数開講されており、私はその中から卒業まで10科目程度履修することを通じて、科目の理解が深まると同時に、「人からの話の聞き方」「整理して話すこと」の基本的能力を身につくことができたものと確信している。多数の演習が開講されるため、専任教員のみでは足りず、他大学の専任講師か実務家教員が多く担当していた。しかし多くは同大学の出身者ということもあり、後輩を熱心に指導しようとする熱意にも恵まれた。

(2) 必要な数の講義科目

演習で議論を行う前の段階として、講義に出席することにより基本的な体系の理解を図っておくことが必要である。

面接の際に、筑波大学出身のある学生が「○○論」(入門的な科目)という講義科目で学んだある特定の分野に深く興味を持った旨話したので、私が『それほどこの分野に興味があったのならば○○学(教科書も多数市販され、通常どこの大学の学部でも開設されていそうな科目名)の授業も履修したでしょう。理解が深まったでしょう?』と尋ねた。そうしたところ『そんな講義や演習はありませんでした。』と聞いて思わず仰天した(同じことが一人や二人ではない)。他大学出身の受験生だと、当然○○学で学んだことを素材に議論したのだが。

少人数の学生に対し少数の科目を開講している大学と、マスプロ大学ではあるが、必要な科目はしっかり揃え学生に対して必要な教育を行っている大学とでは、どちらが学生のためになるであろうか。ある学問分野を体系的に学ぶために必要となる特定の科目が全く開講されていないというのは、その分野を学びたいとする学生にとっては致命傷である。学生数が少人数であるから、開講する授業科目は少なくとも良いということには決してならないだろう。

(3) 集中科目受講者の戸惑い

大学院在学中には、関連する分野については学類で開設されている授業も聴講する

ように努めたが、今でもその受講方法がよくわからないままであるのが「集中科目」である。私が学部を卒業した私立大学においては、集中科目の存在すらなく、最低でも半年単位で完結する科目しか受講したことがなかったため、当初2日間程度で単位を取得することに戸惑いを感じた。

毎週1回から2回講義がある科目だと、理解できなかった内容が出てくると、講義後に友人と話し合ったり、あるいは講義中指示された文献を後日図書館で探したりして読んだものである。先生の言われることが理解できないのは悔しいのである。次回の講義に出席する際には、例え教員の希望するレベルには及んでいなかったとしても、自分なりには前回までの内容はわかったつもりになっていた。

ところが集中講義ではそれができない。とりわけ初日の午前中で理解できない箇所があると最悪で、午後の授業などまったく理解不能である。復習しようと思っても翌日は続きの講義があるため、復習時間はその日のみで、朝から晩まで授業に拘束されていたことによる疲れも伴い、物理的にとてもできるわけがない。教員を確保する関係上、応用的、発展的な科目についてはやむを得ないかも知れないが、特定の学問分野を体系的に学ぶ際に不可欠であると思われる科目については、集中講義は開講しない方がよいように思う。

4. ―OBとしての愚見

都内大手の大学だと、教員数も多いがそれ以上に学生数も多いため、いずれの学生に対しても「○○大学卒としての最低限の素養」を身につけさせようとすることは事実上無理であろう。そのため我々採用側としても、○○大学○○学部卒業（卒業見込）という肩書だけでその資質や素養を判断できるとは到底思えない。

そのような大学学部を卒業した者の中には、怠惰に4年間を過ごし考え方の広さや深さにおいて入学時と変わらない（ときとして入学時よりも低下している）と思われる学生が見受けられることも少なくない。しかし一方では学部在籍時に基本的な講義内容を理解するとともに発展的な講義を受講して自分の興味関心を深め、さらには演習で磨きをかけたり、友人と同好会等で一生懸命に議論してきたりして、しっかりと自分なりの問題意識を持ち社会に貢献しようという志の高い者も多数おり、「さすがは○○大学の学生である」と、私が脱帽したことも決して稀ではない。

このような優れた学生にお目にかかるにつけ、大学4年間というのがいかに本人の将来の方向性を決めるに当たって重要な期間であるかを思い、逆に言えば巷で入学時

偏差値が高いと言われ、少人数で恵まれた教育環境にあるという国立大学に入学しても4年間知的刺激を受ける機会に恵まれず、ただ教員の言われた定理や通説を無批判に頭に詰め込んだだけの学生とでは、まったく社会に対して期待される貢献度が違うと思わざるを得ない。

このような社会に役立つ人間を教育するという意味で、まずいかに学士課程における教育が重要であるかを痛感している。大学に対する社会の評価は、学士課程を経た学生の資質に負っている。大学院における教育の充実もいいが、それはしっかりした学士課程教育の後に考えるべきであろう。

(やまぐち　とおる／平成4年3月経営・政策科学研究科修士課程修了)